

島根大学附属図書館蔵『人麿御奉納百首和歌』

— 紹介と翻刻 —

芦田耕一

ここに翻刻するのは、島根大学附属図書館所蔵の『人麿御奉納百首和歌』（函架番号九一・一五八）である。詳書誌的説明から始めよう。写本、全一冊。袋綴で、縦二九・八糎、横一六・三糎。本来の表紙は本文用紙と同質の楮紙。表紙中央に墨で「人麿御奉納百首和歌^全」と打ちつけに書かれている。この表紙の上に、少し厚目の紙で新たに表紙を付けている（裏表紙も同じ）。これには、左側に題簽で「人麿御奉納百首和歌」とある。もとの表紙の次の丁に、内題として「石見国 播磨国 人麿社千年忌御法楽和歌」と中央にあり、左下方に「享保八年^卯三月十八日」と書く。蔵書印は島根大学図書館印以外に、もとの表紙や内題の丁に旧蔵者の朱印「天城蔵書」「島根県女子師範学校郷土室」がある。全十九丁より成り、遊紙はない。一面は六行で、和歌は一首一行書き、計百首。歌題と作者名が一行に書かれる。作者表記は後述の短冊表記とは異なり、丁寧な記載になつており、そして大部分の人名について、その横に朱で享保八年時の年齢が付加されている。

柿本人麿の千年忌は享保八年（一七二三）三月十八日に行われた。これに先立つ二月一日に、柿本大明神に正一位を贈位する神階宣下のことがあった。『続史愚抄』同日条に拠れば、

自_レ法皇（注、靈元院）被_レ奉_レ授_二柿本大明神号于石見人丸社_一。

頃日。凡当千年忌。由有説。而幾年末詳。此日。被_レ行_二柿本大明神正一位神階宣下_一。

自昨夜宮中御事。上卿権大納言。通稱。奉行藏人頭左中弁頼胤朝臣。宣命使

侍從兼雄朝臣。不向二社頭一參拜耳云。

とみえる。また、『高津町誌』（島根県美濃郡高津町小学校編。昭十三年刊）所収の「柿本神社由緒」や「柿本社^並真福寺由緒明細記」にもこのことがみえる。いま、詳しい「由緒明細記」を掲出すると、
此年二月朔日神階宣下アリテ正一位ヲ贈賜フ。即チ禁中ニ於テ勅使ノ儀式厳重ニテ宣命、位記、官符ヲ当寺ヘ納賜ハル。此時神号モ改テ柿本大明神ト勅許アラセラレ寺号モ真福寺ト改メ勅シ玉フ。時ノ御伝奏ハ中院前大納言通躬卿、中山前大納言兼親卿諸司代ハ松平伊賀守殿ナリ。諸司代ヨリ当御家ヘ御指紙ヲ以テ当寺ヲ被召登諸事諸司代ヨリノ御指図ニテ令勤玉フ。

であり、奉務の寺で柿本神社の麓にあった「人丸寺」を「真福寺」と改名したなどが新たに分かる。

享保八年三月十八日を千年忌とすれば、前述の「由緒」および林道春『国史実録』巻七にいうとおり神亀元年（七二四）に没した（『実録』では三月）ことになる。また、柳田国男に拠れば、没年について、養老七年（七二三）三月十八日および大同二年（八〇七）八月二十四日の二説があったといい、後者では余りにも長命になるということ、前者を採用して千年忌が行われたという。三月十八日については、もともと観音の御縁日であり、そして小野小町や和泉式部の忌日であったことから、精霊の季節とする慣行があったのではないかと述べている（『一目小僧その他』）。現在では、人麿の没年は平城京遷都（七一〇年）前くらいにしている。

この千年忌の折には処々で祭が営まれ、和歌奉納の企画も多かったと思われる。たとえば、江戸堂上派歌人の指導者連阿法師の勧進による石見柿本神社への「人丸千年忌詠百首和歌」奉納があった。そして、ここに紹介する石見国と播磨国の柿本神社への各五十首ずつの奉納もこの一連の企画である。これは『続史愚抄』二月十八日条に拠れば、次のようである。

自法皇賜和歌各五十首及神階官符位記宣命石見女房奉書播磨
等于石見播磨柿本両社僧。（中略）来三月十八日可奉納者。

「由緒明細記」には、

法皇御所ヨリモ御法案ノ和歌五十首ノ御短冊ヲ納メ玉ヒ巻頭御宸翰
ニテ其余ノ公卿モ皆御自筆ナリ。

とある。これと同様のことが『人丸贈官位記』に、

法皇御所御震筆イヌシ公家衆何茂イヌシ自筆御懷紙短尺越前零紙之由

とみえることから、奉納は短冊で自筆であったことが分かる。石見国柿本神社（島根県益田市高津町）への短冊は、文部省指定の重要美術品として同社に宝蔵されている。簡単に説明すると、縦三六・六糎、横六・〇糎の内疊の短冊であり、最後の五十首目は表に「祝言」の和歌、裏に「御奉納享保八年三月十八日石見柿本社御法案」が書かれている。書式はたとえば三首目の「春雪」詠では、

春雪

風ゆるぎ空にさそひてあは雪の
ふるもつもらぬ春のゝとけさ綱平

とあり、型通りになっている。歌題については一筆であり、和歌および作者名は「由緒明細記」等のように別筆の感じをうける。歌題があらかじめ書かれた短冊を各人に渡して和歌などを書かせたものであろうか。一方、播磨国柿本神社（兵庫県明石市人丸町）への短冊については、調査が行き届いていないが、「人丸山柿本神社御由緒記」（柿本神社々務所発行）の「宝物」に拠れば、「重要文化財後桜町天皇御宸筆 仁孝天皇御宸筆」「冷泉家奉納懷紙短冊」がある。しかし、当該の短冊らしきものは見出せない。

このように、この『百首和歌』は、両柿本神社へ短冊で奉納した計百首を冊子本の形でまとめたものである。

次に、和歌の作者等について、必要なものに限り説明を加えていこう。まず石見国奉納の巻頭歌「立春」詠については、作者表記が

なく、短冊にも書かれていない。これは「由緒明細記」から靈元院（一六五四年生〜一七三二年薨）の詠と考えられる。二首目「竹簾」詠の有栖川阿計磨は靈元院皇子職仁親王（一七一三〜一七六九）であり、幼名を「明宮」と称する。享保元年に有栖川宮を相続し、同十一年親王、翌十二年に元服する。「残菊」詠の尊祐（一六九八〜一七四七）は法親王、靈元院の猶子で実父は伏見宮邦永親王である。奉納時は二品、天台座主である。「冬月」詠の基雄（一六八七〜一七四〇）は藤原氏で奉納時は従三位非参議である。「初恋」詠の邦永親王（一六七六〜一七二六）は靈元院猶子で、実父は伏見宮貞致親王である。「古寺」詠の尊昭（一六九九〜一七四六）は靈元院皇子、後に尊賞と改名する。奉納時は二品、興福寺別当である。そして、播磨国奉納歌についていえば、巻頭歌「霞始聳」詠に作者表記はないが、前と同様に靈元院であろう。なお、前詠ともに「靈元法皇御集」には入集していない。三首目「梅遠薫」詠の直仁（一七〇四〜一七五三）は靈元院孫、東山天皇皇子である。享保三年親王になる。奉納時は二品、弾正尹である。「花満山」詠の常忍（一六六三〜一七三八）は園家藤原其福男で俗名は其勝。おぼの国子は靈元院母。正二位権大納言を限りに正徳三年（一七一三）八月二十八日に出家する。「紅葉深」詠の幽海（一六五九〜一七二四）は東久世家源通廉男で俗名は博高。正三位非参議を限りに常忍と全く同じ日に出家する。「夜時雨」詠の貞建（一七〇〇〜一七五四）は東山天皇の猶子で実父は邦永親王である。宝永六年（一七〇九）親王となる。奉納時は兵部卿である。

ここでは、各五十首のあとにみえる「題者」「奉行」を取り上げ

よう（これらは短冊には見えない）。「題者」は題を選定する人である。石見奉納の「藤谷前宰相」は「盧橘」詠の作者為信であり、播磨の飛鳥井雅香は「寄草恋」詠の作者でもある。この兩名は他の折にも題者となっており、たとえば、前者は享保八年正月二十四日の「和歌御会始」、後者は享保八年正月十四日の「法皇和歌御会始」に奉仕している（『続史愚抄』）。「奉行」は事を執り行なう人の意である。「奉行」の「三条中納言」「日野中納言」を特定してみよう。このことのために、すべての作者表記を検してみると、享保八年時の官位としては相応しくない例が多くある（年齢は享保八年時なので、年齢の朱筆は別筆であろう）。少し挙げて説明してみると、「苗代」詠の光栄について、従三位参議であるのは享保五年六月二十一日から権中納言任官の七年四月十四日までである。ところが、「更衣」詠の家久が内大臣からここにいう左大臣になるのは七年五月三日であり、光栄の期間とは少しずれがある。「隣家鶏」詠の兼香にも同じことがいえ、内大臣になるのは同じ七年五月三日である。また、「寄衣恋」詠の治房が正三位に昇進するのは七年七月二十三日であるので、ここにいう従三位の記述はこれ以前に拠っている。そして、「早秋」詠の輔実が関白を辞したのは七年正月十三日であり、「前関白」と記されるのはこれ以降ということになる。これらから考えていくと、官位表記は享保七年前半期ごろに拠っているといえるのではないか。

いま、享保七年そして八年をも含めて、「奉行」の兩名に相応しい者を調べるに、該当者はいないように思う。三条家には前左大臣実治、前権大納言公允がみえるけれども。そして、三条西家ならば

〔355〕

作者である権中納言公福がいる。一方、日野家には作者になつてゐる資時がいるが、権中納言になるのは翌九年二月十八日である。この時点に拠つて記したかとも考えられるが、三条家には該当者がいないことからやはり無理があらう。

最後に、武者小路実陰の「山花」詠、「寄道祝」詠が実陰の『芳雲集』に同題で入集していることを言い添えておこう。

以上、述べ来たつたように、享保八年三月十八日の人麿神社奉納和歌は、靈元院が先頭に立つて特に院に近い皇族および公卿達と語らつて制作したものと思われる。当時の公家歌壇や靈元院歌壇の一斑を窺知しうる好個の資料であらう。

注1 『柿本社御法楽和歌』に類する題での伝本が多い。た

とえば、国立国会図書館本、静嘉堂文庫本、彰考館本、徳島県立図書館本など。

2 松野陽一氏による翻刻がある。「連阿勸進享保八年

『人丸千年忌詠百首和歌』―翻刻と紹介―（研究と資

料の会発行「研究と資料」第十一輯 昭五十九年七月）

3 未見。注2に所引の本文に拠る。

4 他に、桜町天皇の延享元年（二七四四）八月二十八日、

桃園天皇の宝暦十年（一七六〇）五月十八日、後桜町天皇の明和四年（一七六七）五月十八日、光格天皇の寛政十年（一七九八）三月三十日、仁孝天皇の天保十四年（一八四三）六月十一日に奉納の、おのおの御製以下五

十枚の短冊が宝蔵されている。

凡 例

一、翻刻にあつては、用字法・仮名遣いなど底本に忠実であることにとつとめたが、旧字や異体字については通行の字体に改め、読解の便をはかつて濁点表記を施した。

一、底本の誤字と認められる場合は「（〇〇カ）」と傍記や下記して推定本文を示しておいた。また、奉納の短冊と異なる場合は「」を付して短冊の本文を掲げておいた。そして、年齢表記の朱については、その旨を省略した。

一、各半丁の終りを、本文の丁から数えて、「1オ」、「1ウ等」で示した。

一、末筆ながら翻刻を快諾していただいた島根大学附属図書館にお礼申し上げます。また、貴重な短冊の閲覧を許していただいた益田市の柿本社宮司中島匡英氏に感謝の意を表したい。

翻 刻

人麿御奉納百首和歌全（外題）

石見国
播磨国

人麿社千年忌御法楽和歌

享保八年卯三月十八日

（内題）

立春

この道の光もそひてのどけさを世にしきしまの春は来にけり

竹鷲 有栖川阿計曆

春ごとのやどりにしめて呉竹の千世をこめたるうぐひすの声

春雪 二条関白左大臣従一位綱平

五十二歳

風ゆるぎ空にさそひてあは雪の降もつもらぬ春のどけさ」1オ

梅風 正親町前権大納言従一位公通

七十一

手向する神の木のもととをくとも梅がくをくれ山あひの風

柳露 坊城前権大納言正二位俊清

五十七

さほ姫のかざしの玉とみだれけり柳の髪の今朝の朝露

春月 西園寺権大納言正二位致季

四十一

出るより雲はへだてぬ山端も光おぼろにかすむ月影」1ウ

山花 武者小路前権中納言実陰

六十三

みよし野は花にくほはぬ嶺もなし雲もさくらの色に成ころ

野花 滋野井権大納言正二位公澄

五十四

思ふどち猶木の本にやどりしてあすも野中の花にくらさむ

苗代 烏丸参議左大弁従三位光栄

三十五

たねまきていくかになりぬ苗代の水もみどりにすめるあら小田」2オ

松藤 中山権大納言正二位兼親

四十

年ごとの春にもこえてまつがえに咲こそかれ池の藤なみ

更衣 近衛左大臣正二位家久

三十七

夏衣けさはやかにしらがさねとりかさねてもうすき袂や

郭公 今出川権中納言従二位公詮

三(二九)十八

たちばなのかほる軒ばくあかずとや山ほとくぎす過がてになく」2ウ

ウ

盧橘 藤谷前参議正三位為信

四十九

軒ちかくうへて年経るたちばなや昔のまくに猶にほふらむ

早苗 葉室蔵人右中弁正五位上頼胤

二十七

ゆたかなる御代のめぐみはつきせじと数とりそふる小田の若苗

夏月 藤浪正三位大中臣忠実

七十七

いはみがた秋におとらで夏の月高すみ山にすめるさやけさ」3オ

窓螢 清水谷参議左近衛中将従三位雅季

四十

まどちかくてらす螢は文もみぬわがをこたりをいさめてやとぶ

納涼 愛岩正三位源通晴

五十一

音にきくそれさへ涼したちよりてむすばゝいかに滝の白糸

早秋 九条前関白左大臣従一位輔実

五十五

扇をものはやおくばかり秋きぬと今朝音涼し萩のうは風」3ウ

夜萩 万里小路権中納言従二位尚房

四十二

萩の風手まくらちかく所よく夜は更行までにきくにねられぬ

眺鹿 久世前参議従二位源通夏

五十四

すむ月に夜やおしむらしつま恋の鹿のねながら明るしのゝめ

秋夕 七条左近衛中将正四位下信方

四十七

野べふかき草葉に秋のところえて夕べを時とむすぶ白露」4オ

駒迎 日野藏人頭右大弁正四位上資時

三十四

あふ坂の山引こえて雲のうへにこよひぞ出るもち月のこま

嶺月 四条左近衛中将従四位上隆春

三十五

すみのぼる影は千さとのそらの月くまなき嶺にむかふさやけさ

杜月 梅園左近衛中将正四位下久季

三十五

枝しげき森の梢はもりくるも光すくなき夜半の月影」4ウ

朝霧 押小路正三位藤原実岑

四十五

山もとのさとのけぶりのそれならでそなたにみるは秋の朝霧

紅葉 上冷泉侍従従五位上為村

十二

神垣にそむる紅葉を山ひめの手向におれる錦とや見む

暮秋 飛鳥井左近衛中将従四位上雅香

廿一

したふぞよ霧たちこめて行かたはいづことわかぬ秋のわかれ路」5

オ

残菊 尊祐

こと草は色なき庭に一本の残るもあかぬ花のしら菊

湊氷 武者小路従三位藤原公野

三十六

つながぬも氷にとどてみなと入の芦まの舟の行かたもなし

冬月 持明院 基雄

冬の夜はくまなく見えてすむ月の嵐にさゆる影はすさまじ」5ウ

千鳥 吉田従二位卜部兼敬

七十一

すむ月も明石のうらにうかれてやかよふ千どりの夜半に鳴らむ

篠霰 櫛笥参議左中将従三位隆成

四十八

ぬきとめぬ玉とあられの音たてゝ風の吹しく野路のしのはら

里雪 阿野左近衛中将正四位下師季

末なびく竹一むらのおく見えて雪にまがはぬ遠の山ざと」6才
廿四

炭竈 竹内正三位源惟永

四十六

炭やきは雪もあらしもさゆる日を待えて嶺に煙たつらし

初恋 伏見中務卿一品邦永親王

我ながらあやしや何をけふよりは思ひそめてか袖の露けき

祈恋 難波左近衛中将正四位下宗建

廿七

うき人はなびくとなきにいつまでか森のしめ縄かけて祈らむ」6ウ

尋恋 高松右近衛中将從四位下重季

廿六

とひえずやけふもかへらぬいづこにもあらぬ宿なるいらへおぞきく

聞恋 油小路権中納言兼左衛門督從二位隆典

四十

ながれてのあふせもあれないませ川音きくのみに袖はぬるとも

見恋 水無瀬前権中納言從二位氏孝

四十九

しげりゆく恋路ぞまどふ初草のはつかにみへし雪まながらに」7才

契恋 日野西左少弁正五位上兼榮

廿八

たのむぞよ千々の社の神かけて行末とをく契る言の葉

遇恋 倉橋中務権大輔從四位下安部泰章

三十七

夢ならで夢なるものは露ばかりかはす契の夜半の手枕

偽恋 中御門正三位藤原宣顯

六十二

いつはりと思ひもしらで契てし人のこと葉を何たのみけむ」7ウ

変恋 梅小路左兵衛佐正四位下定喬

三十四

ひたすらにかはる心のかゝりせばあだなる人よなに契けむ

久恋 六条前権中納言從二位源有藤

五十二

さりともとたのむにまけていたづらに年月のみをかぞふるはうき

古寺 尊昭

祈れ猶ふりぬる寺の庭にしも道ある御代を千代万世と」8才

山家 三条西権中納言從三位公福

廿七

誰も世に出てつかふる時なれやすむ人まれに見ゆる山ざと

田家 中御門右少弁正五位下宣誠

三十三

よせめさへ淋しくもあるか賤がすむかた山陰の小田のかり庵

旅宿 鷺尾前権大納言正二位隆長

五十二

何かうき草の枕の一夜とてこれも思ふにやどならぬかは」8ウ

述懐 外山前権中納言正二位光顯

七十二

千年経るめぐみは今ぞおよびなき身にだにあふぐ敷島の道

[351]

祝言

中院権大納言正二位源通躬

五十六

このときにあへるを神もよろこびに守らむすゑは千とせ万代

(二行分空白)

「9オ

題者

藤谷前宰相

奉行

三条中納言

(四行分空白)

「9ウ

播磨国柿本社御法楽和歌

霞始聳

明石潟春とばかりにたち初てしまもかくれぬ朝がすみかな

鶯出谷

二条右大臣正二位吉忠

三十五

長栄なる春を待えて出きつゝこゑ里なるゝ谷の鶯

梅遠薫

直仁

木の本はとをき垣ねのむめがゝもさそへばちかき窓の春風」10オ

岡早蕨

中院権大納言正二位源通躬

五十六

岡野辺にやがて咲べき花ならぬわらびは折も人はとがめず

夕春雨

久我権大納言正二位惟通

三十七

夕ぐれはいとゞ霞のたちそひて雫も見えぬ軒の春雨

江春月

梅小路前権大納言正三位共方

七十一

いひしらずむめがゝかほる難波江に月もかすみて影ぞ更行」10ウ

湊帰雁

三条西権中納言従三位公福

廿七

ゆく雁はこゝをとまりと思はでや暮るゝみなとをよそに過らむ

花初開

九条権大納言兼右近衛大将

廿四

さくら花吹初けりなしら雲のかゝるみねよりかほる春かぜ

花満山

常忍

遠近もひとつ盛の花にしも雲はをのへにたちもまがはず」11オ

花随風

庭田参議従三位右近衛中将源重孝

三十二

あだなりとみずや軒ばに吹かよふ風にまかする花のこゝろは

河欽冬

日野蔵人頭右大弁正四位上資時

三十四

川水に移ふ影もいひしらぬ色をふかむる井手の山吹

藤埋松

外山刑部卿正三位光和

四十四

陰たかき松のみどりも見えぬまで藤吹かゝる花ぞ色こき」11ウ

郭公頻

伏見院一品邦永

待わびしそれかあらぬかこのころは山ほとゝぎすこゑのひまなき

早苗多

花山院権中納言従二位常雅

うへわたす千町を広みはるゝとみどりにつゞく小田の若苗

簗盧橘

石山正三位藤原師香

五十五

おもひ出る昔はとをくへだててもちかき軒ばに匂ふ橘」12オ

杜夏草

千種從三位源有起（統カ）

三十七

あげまきも分こぬ森のした陰は夏の草ばのしげるまゝなる

夏月涼

滋野井右近衛中将正四位下実全

廿四

夕立のなごりの露の草むらにやどるも涼し庭の月影

嶺夕立

坊城藏人権右中弁正五位上俊將

廿五

時のまにこなたははれてみねとをくくもるとみるや夕立の空」12ウ

螢似露

高辻文章（博カ）轉（博カ）士正三位藤原総長

三十六

ちりまがふ光はおなじ玉笹の露吹風にほたるとぶかげ

新秋風

鷹司前関白前左大臣從一位兼熙

六十五

きのふけふ軒ばの松に音かへてめにみぬ秋も風にしらるゝ

織女契

広幡前権大納言前右大将正二位源豊忠

五十八

神代よりいかに一夜とさだめてかかはらぬ星の契なるらむ」13オ

萩驚夢

久世前參議從二位源通夏

五十四

露のみかむすぶとすれば手枕の夢もみだるゝ萩のうは風

萩如錦

錦織彈正大弼從四位下卜部從久

廿八

行かへり分る錦のたてぬきに心もうつる野への秋萩

秋田露

桑原前參議式部權大輔從二位菅原長義

六十三

とをつくにあまねき君がめぐみをば田面にみてる露までもしれ」13ウ

ウ

鹿声遠

岩倉前中納言從二位源乘具

五十八

山風につてにこそきけ嶺とをくもみぢみだれて鳴鹿のこゑ

虫近枕

壬生左近衛中将正四位下俊平

三十

こゑちかくかたらひ明せきりくす夜さむはおなじ秋の枕に

月出山

藤谷從五位上侍從為香

十八

さしのぼる光ぞあかぬくるゝよりまたれし山の秋の夜の月」14オ

松間月

清水谷參議左中将從三位雅季

四十

まち出るをのへの月も高砂の松の葉分の影はえならず

水郷月

五条文章博士從三位菅原為範

三十六

こよひしもよどのわたりに船だして光くまなき月にあかさむ

紅葉深

幽海

幾たびのしぐれに染て色ふかきもみぢの梢嶺にみゆらむ」14ウ

暮秋霧

高松左近衛中将從四位下重季

廿六

立とまる色にみるべき夕霧もくるゝをいそぐ秋のわかれ路

[349]

夜時雨

貞建

手枕の夢はむすばで更る夜に風のしぐれを幾たびか聞

橋落葉

阿野権中納言公緒

五十八

吹おろすみねの嵐に散わたる紅葉もふかき谷のかけはし」15才

寒草霜

藤浪神祇大副正三位大中臣徳忠

五十四

百草を分つる野辺も冬来ては霜の花のみ見えて淋しき

冬月冴

六条左近衛中将従四位上源有起

廿三

雲はらふ嵐はげしくさえくゞて更行月の影はすさまじ

瀉千鳥

中御門右少弁正五位下宣誠

三十二

明石瀉月もこぼれる浪まよりしほかせさむみ千鳥鳴こゑ」15ウ

狩場雪

武者小路従三位藤原公野

三十六

さゆる日もあかぬかり場に引すへて袖さへ雪のましらふの鷹

市歳暮

藤原前参議正三位為信

四十九

いまはとてかへる市路のあき人にとまらぬ年もつれて行らし

寄雲恋

尊祐

行ゑなきおもひは空にうき雲のはれぬもさぞと人はしらじな」16才

寄河恋

水無瀬前権中納言従二位氏孝

四十九

河と見てわたらぬ中にもるゝなよ我やは浅く人につゝみし

寄木恋

押小路正三位藤原実岑

四十五

幾とせか人の心のつれなきは松のみさほをいつならひ剣

寄草恋

飛鳥井左近衛中将従四位上雅香

廿一

月草の移ひゆくは知らでわが思ひ初しも今更にうき」16ウ

寄鳥恋

北小路従三位藤原徳光

四十一

いつまでかまつ夜かさねてあふ事はとを山鳥のつらき独ね

寄衣恋

清閑寺権中納言従三位治房

三十四

恨のみかさなる夜半はから衣かへしてまたん夢だにもなし

隣家鶏

一条内大臣正二位兼香

三十二

中垣のそなたの鳥は誰がためかまだ夜ぶかきにおどろかすらん」17才

オ

遠村竹

岡崎前参議従二位国久

六十五

すみなるゝ民の家居もすへとをくつゞくみどりの呉竹の陰

田家路

烏丸参議左大弁従三位光荣

三十五

跡とめて民は畔をもゆづる世にかへるや小田の里の中道

夕旅行

広橋権大納言従二位兼廉

四十六

とひよらむさとやはるけき夕日影のこるにいそぐ野への旅人」17ウ

浦眺望 東園権大納言正二位基長

四十九

へだてなくながめをよせてはるゝ日に見ぬ島うかぶ浦の遠渦

寄道祝 武者小路前権中納言従二位実陰

六十三

身をあはせ千世につたへて君も臣もやはらく道ぞ大和言の葉

(二行分空白)

「18オ

題者 飛鳥井雅香朝臣

奉行 日野中納言

(三行分空白)

「18ウ

